

樽前山における火山噴火防災対策

胆振東部森林管理署

【おつめ】

胆振東部森林管理署は、南部を太平洋に面し、苫小牧市、白老町、むかわ町にある約6万2千haの国有林を管理経営しています。

管轄区域内の森林は、国有林所在市町の水源林や火山地域（樽前山）における防災林としての働きのほか、「ポロト自然休養林」・「インクラの瀧風景林」・「クッタラ湖」・「ホロホロ山」等、多種多様な景勝地もあることから、レクリエーションエリアとしても期待されています。

【樽前山について】

樽前山（標高1041㍎）は、後支笏カルデラ火山の一つで、1739年の大規模噴火や、現在の溶岩ドーム（北海道指定天然記念物）を形成した1909年の中規模噴火、また

その後も周期的に小規模噴火を繰り返しています。1981年の小規模噴火を最後に火山活動は沈静化していますが、今後も予断を許さない状況にあると言えます。一方で、山麓下流域においては開発が進み、樽前山の噴火による被害は甚大なものになると考えられています。



樽前山頂上の溶岩ドーム

【噴火に備えた取組】

噴火が始まった際に、迅速に避難等を開始できるよう、日頃からの継続した防災活動が大変重要です。

このため、当署では災害警戒地域市町共同で設立された「樽前山火山防災協議会」に構成員として参画しています。



合同登山の様子

本協議会は、各関係機関が参集し、想定される火山活動の状況に応じた噴火シナリオ、火山ハザードマップ、警戒避難態勢の整備等を行っていきます。また、「樽前山合同登山」を毎年春と秋に開催し、防災意識の向上に資することとしています。

合同登山は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため中止していましたが、今年の春の開催分から4年ぶりに再開され、当署から署長ほか3名が参加しました。登山では気象庁から樽前山の現状等の説明を受けるとともに、間近に噴煙や地熱の様子を感じ、参加者は火山防災への意識を新たにしました。

【噴火に備えた治山事業】

樽前山の噴火では、積雪期に火砕流が発生すると、

その熱で雪が融かされて発生する泥流が高速に流下し、市街地まで氾濫することが想定されています。

そのため当署では、樽前山麓の国有林野内において発生する泥流を貯留し、安全な方向へ導くための導流堤等の施設整備を関係機関と連携の上、計画的に実施しています。

今後噴火防災のための効果的な施設整備を推進し、地域防災への取り組みを進めるとともに、森林・林業においても地域に貢献できる森林管理署として、様々な取り組みを進めていきます。



樽前山麓（熊ノ沢）で施工中の導流堤